

FUTURE AREA



未来エリアとは何か？地域創造スタイル
未来プロデューサー活躍ストーリー

【推奨環境】

この E-book 上に書かれている URL はクリックできます。できない場合は最新の AdobeReader をダウンロードしてください。(無料)

<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>

【著作権について】

この E-book は著作権法で保護されている著作物です。

下記の点にご注意戴きご利用下さい。

この E-book の著作権は作成者に属します。

著作権者の許可なく、この E-book の全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

この E-book の開封をもって下記の事項に同意したものとみなします。

この E-book は秘匿性が高いものであるため、著作権者の許可なく、この商材の全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

著作権等違反の行為を行った時、その他不法行為に該当する行為を行った時は、関係法規に基づき損害賠償請求を行う等、民事・刑事を問わず法的手段による解決を行う場合があります。

この E-book に書かれた情報は、作成時点での著者の見解等です。著者は事前許可を得ずに誤りの訂正、情報の最新化、見解の変更等を行う権利を有します。

この E-book の作成には万全を期しておりますが、万一誤り、不正確な情報等がありましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

この E-book を利用することにより生じたいかなる結果につきましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

未来のエリア

【あらすじ】

霞が関の経済部門で働く若手公務員、佐々木洋一とITコンサルティング会社の望月 和夫は新しい地域ビジネスの提案としてバーチャル・エリアビジネスを企画するが、うまく進まない。そんな中、未来プロデューサーのトム・スコットがチームを率いて、新しいプランを提案してきた。果たして次世代のエリアとは何なのか？ 新しい地域ビジネス創造スタイルを考えるストーリー。

【INDEX】

- 第1話 バーチャル・エリア
- 第2話 エリア・ポジショニング
- 第3話 ウォール
- 第4話 未来プロデューサー達
- 第5話 ニュー・エリア

未来のエリア#1

バーチャル・エリア

佐々木洋一（ヨーイチ）は霞が関で環境部門に勤務する公務員、昨年より地方の経済部門に異動を受け、言われたままの仕事の日々こなす毎日が続いていた。

佐々木：「部長、地方創成とかいいですけど、私たちがまず新しいことをしようとしても、結局上からの仕事をするだけ。これでは地方の提案も意見もありません、地方は馬鹿にされているんじゃないですか？」

部長：「佐々木君、気概はいいが、お役所仕事とは元来そういうものだよ。予算を消化していくものだ。余計な意見をいうべきではない。地方といっても中央あつての地方じゃあないのかね？」

洋一：「あー、何かムカつくな。」

席に戻りながら洋一が悪態をついていると、同僚の霧島亮子（リョーコ）が答える。

亮子：「何が？」

洋一：「だってさ、エネルギーや食糧のテーマの時は省を挙げてやっていてさ、新規ビジネスとか地域活用ネタになると提案しなでくれとさ。同じ国の人間とは思えないね。ベンチャー経験ある人が少なくとも地方担当に数人いないと

年寄ばかりじゃ、話にもならないよ。」

亮子：「そうだけど。あなたもいつか年寄になるんじゃない。」

洋一：「俺は年をとれません。だいたい、地方＝シルバーって相場ができてるのが変だよ。」

亮子：「そんなことはないわよ。最近は若者でも地方に積極的に移ってきているし。新しいビジネスや人生設計をしている人もいるわ。」

洋一：「それは、東京で生活苦しいからだろ？」

亮子：「それもあるけど、今の社会システムに疲れたみたいよ。」

洋一：「じゃあ、地方で新しい社会システムを売りにすればいいだけだろ。」

亮子：「そんな。マンガじゃないのよ。」

洋一：「いいや。マンガなのは意外と中央の大人組織の方かもよ。」

—IT コンサルティング会社 東京—

望月和夫（カズオ）はIT コンサルティング会社の代表であり、特にマーケティング戦略を売りにしていた。今日も担当のクライアントへAIによる推定ネットワーク地域いわゆる“未来エリア”について提案をしていた。

望月：「つまり、いままでのデータによるAIエンジンでは、商品や売上という個別の予測をしていたわけです。弊社では、エリアを着眼して分析し、予測をたてます。」

お客：「しかし、いくら、エリアの予測がついても所詮、仮想エリアだし、我々の商品がそのエリアで購入される保証はあるのかね？」

望月：「ですから、バーチャル・エリア空間で売ります。」

「購入者は、そのエリアで買いたいと思う“エリア”利用者であって、実地方在住者だけではないのです。」

お客：「なるほど。エリアで買いたいと思う、未来購入予定者を衛星とネットの両方でデータ融合させて測定分析するわけだな。」

望月はお客との打合せが終わると、佐々木に電話をかけた。

望月と洋一は以前、メーカーの企画担当者の紹介であったことがあり、その縁で何度か交流をしていた。今回のバーチャルエリアについても望月から連絡があり打合せをWEBでやることになった。

洋一：「おもしろいですね。」

望月：「リアル地域ではなく、バーチャルエリアとしているところがミソなんだよ。」

洋一：「つまりは、地域チャンネルをもっていない企業がバーチャルエリアに未来の商品を企画することで、それを、コストをかけず地域色を出しつつ世界にアピールできると。」

望月：「昔風にいえばエリアのマイクロファンド広告かな。」

洋一：「なるほど。で、そのエリアビジネス測定はできるのですか？」

望月：「衛星を使っておこなえば可能。最近はそれをメインに売りにしはじめているのだけれど、なかなかね。」

洋一：「では、明日にでも部長に話して地域活性活動予算に組み込めるか聞いてみます。これぐらいやらないと、なんのために地方にいるのかわかりませんから。丁度いいです。」

望月：「ありがとう。宜しく頼むよ。」

と、WEB 会議システムを切ると、洋一は「さて、どうやって落とすかだな。」と、ひとり呟いた。

未来のエリア（第1話） ー終わりのー

未来のエリア#2

ーIT コンサルティング会社 オフィスー

望月和夫は IT コンサルティング会社を立ち上げていたが、コンサルティング業はどうしてもクライアントの現実を見るサービスになりがちなので、今後のことを考え、未来投資として個人的に未来プロデューサーのトム・スコットと契約をしていた。

今日は3か月ぶりに米国からトムが来日していたので、WEB 以外で直接会って近況報告をおこなうことにしていた。

自分の最近のエリアコンサルティングについての動向を話してみた。

トム：「世界地図が変わるかもしれないよ。」

望月：「どういうことだ？」オフィスの外から手にしたコーヒーを1つトムに私ながら訪ねた。

トム：「リアルな国家セグメントも変化あると思うが、それ以上にバーチャル上ではセキュリティのネットワークと主義政策によるブロックができてきているということさ。」

「インターネット社会におけるインフラサービスにおいて、世界はつながって

いる錯覚におちいったが、実はローカルのままだったということ。」

体を前のめりになりになりながら耳を傾けた。

トム：「たとえば、GPSによるポジショニングシステムがエリアによるバーチャル商圈を構成する要素になるという時代になってきた。」

トム：「商圈が仮想合成されるということは、新しい発想が生まれる可能性が高い。」トムは目を自分に向けながら、可能性を持った様相で

「プロダクトをつくるエリアと企画をおこなうエリア、販売するエリアと簡単に3つに分けて考えてみよう。」

望月：「いままでと同じじゃないか？」

トム：「違う」

「いままでは、物流や製造など現実プロセスの上で動いていたが、今回はエリア組み立てマーケットをつくる点が180度異なる。」

「ドローンデリバリー、スペースデリバリー、ロボットデリバリーと流通変化していく中で、地域の特性を選んで合成してもいいじゃないか？もちろんバーチャル上だが。」

望月：「なるほど。」

トムは、飲み干した空のコーヒーカップを2つ机の上で移動させながら、一か所で重ねた。

トム：「こうすると、エリアはパーツになり、様々な特色のあるエリアが選択できる。」

望月：「そうだな。」

トム：「それだけではない。仮想でエリア合成するのだから、時間の概念も必要だ。つまり、未来戦略、タイムスケールだ。」

—未来のエリア 第2話/終わり—

未来のエリア#3

ウォール

-霞が関 某省 会議室-

佐々木洋一は望月のアイデアを企画書に仕立てて、関係者と会議をおこなっていた。望月和夫もコンサルティング会社のアドバイザーとして同席しての説明会だった。

佐々木：「ということで、今までの地域の概念をデジタル化した新しい発想が必要なのです。」

部長：「そうはいうが、今までとの違いがよくわからないな。従来の地域ビジネスと何が異なるのか、もう一度、メリットを説明してくれ。」

佐々木：「ですから... 先ほどから話しているじゃ。」

望月：「私の方から説明いたしましょう。」

部長：「そうしてくれ」

望月：「簡単に言うと、ゲームに新しいステージを作っているとお考え下さい。」

部長：「おいおい、我々はゲームをしているわけではないぞ。」

望月：「おっしゃる通りです。ゲームのような時代に併せていく思考を持つこと

はスマートという言葉に置き換わっているかもしれませんが、ある程度必要です」

部長：「たしかにな。」

望月：「そこで、現実地域を仮想エリアとして捉えた場合、部長はどのようなことがイメージできますか？」

望月はパソコンを操作して、ネットにつなぎあるサービスを動かしてみせた。

望月：「ここに、あるエリア A が表示されています。このエリアは製造会社が多く、実際に商品を製造しています。特に大手製造業のファクトリーが多く存在しております。次にエリア B をご覧下さい。ここは AI などの最先端ソフトウェア技術を開発しているベンチャーが多く存在しています。」

望月：「ですから最終目的は、エリアの魅力を引き出す為に、例えば今の例ですとエリア A とエリア B をエリア AB や C にしてバーチャルに展開すればより効率よくアピールできるじゃないですか？」

部長：「なるほど。」

佐々木：「ですから、部長バーチャルの世界だともっと自由にエリア D, E をつくれんですよ。」

望月：「その通りです。現実エリアでは A, B だけですが、バーチャルエリアを新しく作り、エリア C、エリア D としてお互いの特色を活かしたり、足りない部分の補強エリアを設定するのです。」

佐々木：「そこに、さらに時間の概念を入れるのですよ。」

部長：「時間？」

— バー77 —

望月と佐々木はひとしきり部長に説明を終えた後、佐々木のお気に入りの近くのバー77に向かった。

佐々木：「いやー、本当にご苦労様でした。」

望月：「しかし、理解されるのに時間かかりそうだね。あの調子だと予算化はまだまだ先かな？ なによりビジョンに賛同されることから、相当のキャズムを感じるね」

「でもね、そちらの若い、霧島亮子さんにも頑張ってお手伝いしてもらったんだけどね。」

佐々木：「亮子何かしたんですか？」

望月：「いや、私の説明で難しい言葉があったら、部長さんにサポートしてあげて下さい、ってね。」

佐々木：「くう～、自分に聞いてくれればいいのに。」

望月：「わるい、わるい。」

佐々木：「でも、本当に、ロスってますよね。望月さんの説明相変わらずさすがです。」

望月：「いや何ね、自分も参謀がいるんだよ。」

佐々木：「えっ？」

-未来のエリア（第3話） 終わり-

未来のエリア#4

未来のプロデューサー達

トム・スコットがシンガポール、イタリアの未来プロデューサーを紹介すると

未来エリア提案を出してきたのは、望月たちが佐々木と打合せをおこなった2週間後だった。

VR ROOMによるMEETINGに参加するように事前に望月から案内メールを受けていた佐々木 洋一は、英語もさることながらVR MEETINGが初めてだったので緊張しながらの参加だった。

自宅の部屋から慣れないVRの画面に専用のデバイスからログインし、ROOMに入ってみると。

既に複数のMEETING BOXが南国の海の背景画像に浮遊しており、まるでクルージングしている船の上でバカンスしている錯覚だ。

MEETING BOXの横にはいくつかのFUTURE THEMEがコンテンツ浮遊しておりその中にはFUTURE FACTORYやTHINKING COMMUNICATIONなどがあつた。

佐々木：「なんだ、ここは？」

と、言われた MEETING BOX に認証キーを入れると数人と WEB 会議ができる状態になった。

トム：「こんにちは、ヨーイチ」

佐々木：「はじめまして、佐々木と申します。」

トム：「緊張しなくともいいよ、自動翻訳だから日本語で大丈夫だ。それと、望月は別件があり会議には出れない。」

佐々木：「えっ？」

トム：「その代わりに、今回の未来エリアの提案をおこなう、プロデューサーを2名紹介しよう。シンガポールのキャシーとイタリアのマッテオだ。」

キャシー：「よろしく、ヨーイチ」

マッテオ：「なんとかお役に立てると思うよ。」

佐々木：「あ、ありがとうございます。」

トム：「ところで、我々は未来専用のプロデュースをおこなっている。現在のバーチャルエリアでは、現在目線がまだ強い。そこで、時間軸を伸ばした未来エリア戦略を提案したい。ヨーイチはどう思う？」

-未来のエリア（第4話）/終わり-

未来のエリア#5

ニュー・エリア

洋一はトムに突然訪ねられ、答えに迷ったが、普段考えていることをそのまま答えた。

佐々木：「現在の仕組みをバーチャルにしても同じだと思います。そこに集まる

会社、人間、パワーバランス、提供されるサービスは従来とあまり変わりませ

ん。
演出面ではVRやAIの影響は受けると思いますが。そういう意味では時間を入れて未来のエリアの扱える商品やサービスを逆につくることから考えることは面白いと思います。」

キャシー：「さすがね。その通り、中身を変えるには時間を利用する必要があるわ。」

「私のいるシンガポールも世界中から人材を集めて、あらゆる分野に未来投資をおこなっているわ。ただ、バーチャルとエリアそのもの、思考ビジネスはこれからなの。」

トム：「未来のエリアは現在のエリア特性に時間軸を与えて成長させることにある。」

マッテオ：「まあ、簡単に言えば、エリアの成長プロファイルを作るのさ。」

「イタリアは斬新な発想もっているユニークソリューションと長期投資でいかないと小売と観光だけじゃ、きついし面白くないでしょ？」

佐々木：「今は存在しないエリアだから作成できないってことですか？」

トム：「そうだ。」

佐々木：「じゃあ、どうやって未来のエリアを創るのですか？」

キャシーがVR ROOMのFUTURE AREAを見てと指示してきた。
モジュールに触れてみると、カテゴリ別エリアゾーンが無数に宙に浮いていた。

トム：「ここに、世界中の現実エリアの特性を入れて成長させると、成長したもののから新しいエリアとして分岐していく。」

佐々木：「なるほど。入れるものがエリア特性ということなのですね。

出力がバーチャルということになると、実際の商品はどこで購入するのですか？」

トム：「ヨーイチ、残念だが、その発想が古い。」

佐々木：「えーっ！」

トム：「何度も言うが、我々は未来プロデューサーだ。未来への仕組みを企画している。そして、未来の商品を今買うかね？」

佐々木：「じゃあ、何で儲ける...」

トム：「商品以外のものでも儲ける世界を考えたことはないのか？」

キャシー：「ヨーイチ、現実エリアはかならずあるわけよね。そして、時間もかならず経過する。我々の提供するの、その時間が経った未来エリアを生成する仕組みなの。」

マッテオ：「すべては逆から観ないとね」

佐々木：「そうか、自分は古い思考に留まっていたようです。」

トム：「よし、じゃあ、早速我々の提案書をヨーイチに見てもらおう。」

そうすると、目の前に動画のプレゼンテーションが繰り広げられた。

それは、あまりに固まった洋一の思考をほぐすには十分な映像だった。

—数日後 バー77 —

望月：「やあ、どうだった？先日は会議、出れなくてわるかったね。」

佐々木：「いえ、紹介頂いたトムと話をして大変ためになりました。

おかげで部長も説得することができ、未来プロジェクトを計画する予算もめどがつきそうです。それはそうと、望月さんトムとはどこでお知り合いになったのですか？」

望月：「実は俺もよく知らない、然し、彼らは未来プロデューサー、従来の思考で困った時には相談する仲間さ。」

—未来のエリア（第5話）/終わり—